



ビニールクロスの一部(左)と珪藻土の一部(右)を再現し、お湯の入ったビーカーを入れ、20分後に湿度を測った

代表取締役社長 鮫島均氏



# 「珪藻土を進化させたい」と独立・開業

**産地・含有量・有機系固化剤  
不使用にこだわった本物の珪藻土**

ここ数年、健康素材として脚光を浴びている珪藻土。住宅雑誌などでその効果が喧伝されている影響もあり、ニーズは急激に高まりつつある。そんな珪藻土を進化させたいとの思いから、今年5月に株EM MAXを立ち上げた鮫島均代表取締役にお話を伺った。

EM MAXは、主に珪藻土と桐材などを扱っている建材メーカー。EMとはエコ・マテリアル(環境負荷の小さい素材)の略で、その名の通り自然素材にこだわっている。

そもそも珪藻土とは、海や湖を浮遊する藻や植物プランクトンが化石化してできた土のことをいう。重量は軽く、中はほとんど空気層でできている。「珪藻土には、ナノメーター(1mmの100万分の1)という小さな孔が無数に空いています」(鮫島社長)。この無数の孔によって調湿性能があり、臭いを吸収するのだ。

鮫島社長は、珪藻土の吸湿性能を証明するため、ある実験をしてくれた。2つの箱を用意し、それぞれにお湯の入ったビーカーを入れ密閉する(写真①)。片方の箱にはビニールクロスを貼り付け、もう片方には珪藻土を塗った壁を用意した。20分後に湿度を測ると、クロスの湿度が95%で、珪藻土の湿度が67%だった(写真②)。また、「珪藻土は、湿度60%を基準に呼吸する

ので、60%より下がると水分を放出します」(鮫島社長)。

「メーカーによって珪藻土の性能に違いはあるのか?」との編集部の問いに、「産地・商品によってまるっきり機能が違う」と鮫島社長。原料の珪藻土そのものに関しても産地によって機能が異なり、同じ産地でも生のもものと焼成されたもので機能が違うという。同社では、機能が低いと言われる北海道の珪藻土よりも性能の優れたケイソウプレス301を使用。機能の低い「珪藻土A」と比較すると、吸放湿機能の差は、実に10倍になる。

また、記者がもっとも驚いたのが、珪藻土の含有量だ。「珪藻土建材の規制がない」ので、わずか6%珪藻土が入っているだけでも、珪藻土と謳って販売することができる(表参照)。同社のスーパーメルシーと「珪藻土建材H」を比較すると、その差は11倍にもなる。これだけ含有量の違う物が同じ珪藻土として出回っているのだ。そして、もう一つ鮫島社長が注意を促したのが、つなぎとして使われる樹脂(有機系固化剤)

商品名	珪藻土含有量	有機系固化剤
スーパーメルシー	67.0	0.0
メルシーライト	60.0	0.0
珪藻土建材A	57.0	0.0
珪藻土建材B	40.0	4.3
珪藻土建材C	33.0	6.0
珪藻土建材D	30.0	3.0
珪藻土建材E	25.0	0.0
珪藻土建材F	22.0	1.0
珪藻土建材G	10.0	1.4
珪藻土建材H	6.0	3.0

各社の珪藻土建材に占める珪藻土の含有量と有機系固化剤の使用量

(単位%)

の量だ。「小さな孔がいっぱい空いているのが珪藻土のメリットなのに、樹脂を入れたらその孔を潰してしまう」。つまり、樹脂を入れたらどんなにいい珪藻土を使ってもすべてが無駄になってしまうのだ。

「産地・含有量・樹脂をメーカーに確認しないと、珪藻土を塗ってもカビが生えることもある」と鮫島社長は注意を促す。

鮫島社長は、もともと珪藻土を扱う建材メーカーで働いていたが、「自分の思いを込めた商品を作りたい」と独立した。高機能の珪藻土・含有量の多さ・樹脂を入れない・光触媒(酸化チタン)を配合するなど、こだわりの珪藻土を完成させたが、今も新たな切り口の珪藻土を研究開発しているという。

同社のスーパーメルシーとメルシーライトは、それぞれ1㎡あたり2千円と千2百円と価格にもこだわった。鮫島社長の思いのこもった珪藻土は、設計事務所や健康素材にこだわった工務店などで徐々に広がりを見せている。